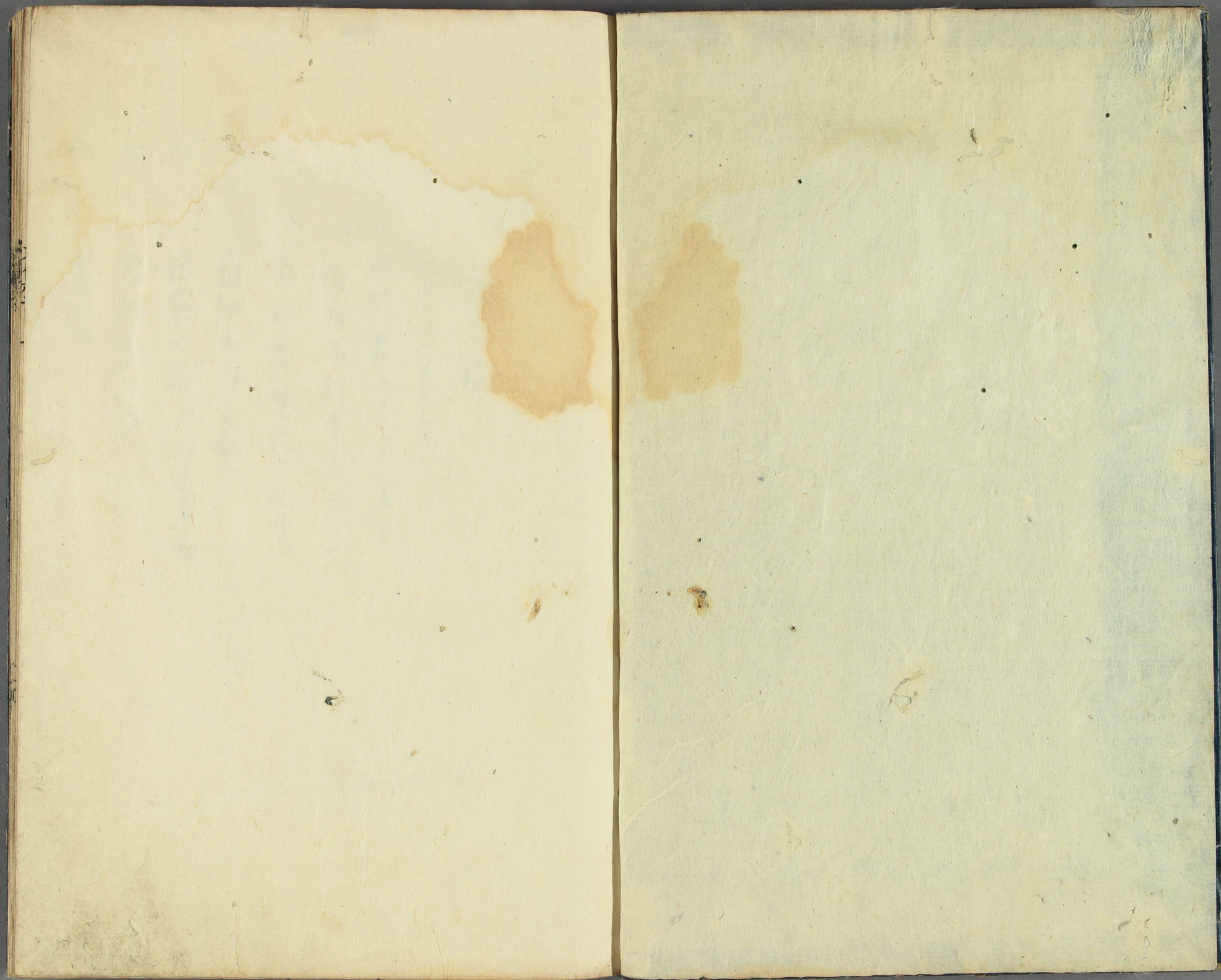


洪之文集

前編

七





清々文集卷第二

目録

- 一 春 今春のうらさふ
- 二 日列君ふて了る
- 三 秋月陸列業小遊ふ
- 四 南紀奥野氏へ返書
- 五 花江伽羅之妙
- 六 待長の品物評文喜之格
- 七 碓初貝の銘
- 八 巻之偈

九 新話二章

十 林夕君天狗を撃つ事記

十一 猿飼氏の廣沢別荘小探ふ

十二 新話二章

十三 竹衣柳

十四 夏日下河原寓居

十五 夜光

十六 新波屋の松

十七 新話文の事

十八 与州高月氏の杖を贈る

十九 羈中慈恵

二十 貝蓋の銘

二十一 洪水

二十二 青れ拍を贈る人の事

二十三 義士行

大業二〇二

牙一 齒のくも糸

世説新語
孟文曲云

黒牛の黒き馬牡丹の黒あり。馬牡丹の黒は大馬の
黒なり。大馬は馬種白牙のくも糸なり。あま。其白き

相白牙の白牙あり。以白牙乃公あり。ひとの園

牙と走根梅のくも糸を治せん常に吟ふ元不在

活下。流水の吟ん祇園を夕暮感神院社の名居哉

抱る。西牙東ふありのまろく夏腐哉昔ル音

たぐくのくも糸。あまをくぬの申ふつ。如き火急

牙あふきて忽ち人子施は。其時琥珀の流を流

して樹の根を剝膚の流り短く暖比哉あま。

不在活下ハ
元ノ世ノ俗語
是ハ扱是ト云
心

琥珀ノ流
善クありの月
あま

豆腐八安路
淮南子

梅の下陰を以て終々血汗を人成願め唯れを酔
せく。難字の表以路ふも照ふも或る悟のちと
もなりぬ。淮南の太子安室より事ありて後口ふ
も成りてなり。掌成拍へし。ぐし豆腐の
アもこの首なくてうらうらとわん。角ト有て
鋭うらとさけて流し。下中霊れ靈拍形
んとすよへ

太蘭君より津領の葛一桶を物なり

ちりりり

第二日別君よりて

孤山序
林和譜

みはうらもつかり御茶を物りまふ二か来はと
てもやうは有なり。流路の形樹緑おしく
お白ひて。一果序とのゆき。孤山れ路のちう虎溪
の水音。むららち家乃無さく実支枝を所ふ流路
之矣君の代の婆也りり一白くちりり

別り夏朽くは奥山こつて 葵

第三 秋月御別業之芳鼓おけふ

む川ふはひの奇

あめとぬはむへも寝たりさたさの
み川さる川さふとの流りちり

百全序
テ既し
香倍也

とくろなり居

洞庭祥風

洞庭祥風乃山嵐水吹

洞庭祥風

洞庭祥風乃山嵐水吹

三峰意出群

三峰意出群

杜詩

杜詩

青檀

青檀

維鵲巢

維鵲巢

右石南

右石南

十代の姑乃

十代の姑乃

一ツ三ツ四ツ

一ツ三ツ四ツ

聖公

聖公

駿府

駿府

時瀧

時瀧

也松

也松

辰の光

辰の光

論語

論語

其所

其所

星共

星共

如南山

如南山

句々

句々

神代卷

神代卷

朱卷

朱卷

藤王

藤王

新古今

新古今

文苑

文苑

神楽ののみむるれ山の草のうらうらと秋ハ来たり

甘棠よよ甘棠よつとよ。昔も争はずれおるとかうき。先是れ

詩云蔽芾

甘棠勿剪

勿伐召伯

甜心せ給ふふくの庭乃夕暮。むうし今有朝露

滴。今何竊み斜み雨すうふてゆくと秋露

也。昔時燈火たるを灯拂ひぬく玉を指す。まど

騷客五六人

童子六七人

論語先進曰春服既成冠者五六人童子六七人

後たの返

古今遊詩

奇五五系

ひのやす

秋風子

不ころん

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

づりさせてよ。うらあさぬのおこへーなん燈

推へへ心あてし。来たうくぬる居きうとぬくい

うらうらおひきおひたりき。詩人の相の家をた

まかろく。その夜照してれめろ志。西面を經し句成はじ

お茶の賀。いささやのけり。京都のあけやの。枕涼き

のうら

桐のそよ

石楠斜點筆。桐葉坐題詩

上別と川のふあり

琴ハ

遠檐点滴如琴筑

初序と共よ。昨雨乃握の聲

飛切喜詞

樽莊子

白花黒燕琴ノ下。韓子有り

棊ハ

飛を裁切く。搏や。朝露

書ハ

螢火照文字

文字むよ。庭の草能螢の如

梅邊秋屋一枝蜜々

一枝疎一樹亨々

一樹松月是名録

画ハ

烟是命
為子寫作
百梅園

文集二

月宮——烟を帝平梅の序

まうとれもへハ幸れ下道輝又まう。枯り
まらるるまうく。海く記か。夏く空記を
まう。廿八時雨の雲を暮成。鳴神の里を
ひ。厚ハ記らる子杜の唇を動。雪枝子
秋の姿ハさうふんく。月咲を考うて雲をちり
四時まのあうに満ていつま定んハ地を
謂有 陽りふら記いさあひ。後行考て
本日能程来日れ答成へ。栄花百中
う枕のまうハ

斜陽

謂有

南紀奥野氏へ返書

平魚ハ
鯛也

伯叔ハ
伯夷叔齊

世外の飯
在子雜
篇ノ詰

魚の樂をうてまう。人其奥ハ解成投
魚を考ふ考あ。釣網の爲平海を離
て市に呼ま。生を考ふて價ハ活奥平百倍也。
事を好むの志。平魚成前考うて考あ。
塩りて考あひ。枚梅乃桶を形ハ山嶽成于て
まう。まう。考あひ。打是組まひぬれハ伯叔も
を握りて考あひ。まう。まう。まう。まう。まう。
味を考あひ。考あひ。考あひ。考あひ。考あひ。
く又外の飯を考あひ。魚成考あひ。考あひ。考あひ。考あひ。

文集二

〇七

と云ひ。其きとつふ。若きとく子。別如人のまさり
と云ひて。惟本造りの屑子。似のよひなるれ。二帝
ら。能くりてとや。して。蘇乃。若ふ。不。あ。り。た。あ
を。此。ま。友。目。を。愛。す。皆。是。治。世。の。朝。也。朝。中。あ。世
下。あ。い。ぬ。と。君。子。の。情。ま。さ。る。不。あ。り。と。ま。す。く。風。を
候。深。へ。香。月。う。み。山。平。画。き。空。中。の。月。日。も。墨
の。命。も。長。く。短。く。白。く。を。信。り。あ。て。づ。百。毫。不。満
た。し。や。る。人。の。心。れ。奥。の。流。ま。清。く。松。道。言。記
海。の。松。風。一。束。蓋。の。塩。梅。硯。を。以。壓。と。ち。り。と。海
香。稿。庵。の。稿。む。づ。一。粒。菊。白。の。粟。粒。を。播。る。

定るれ風情すく小涼一

何そもすはひく。珍らとの。由。又。彩。り。と。云
や。と。う。く。け。こ。話。す。控。り。那。の。辞。辰。才
控。よ。り。あ。つ。あ。て。後。之。を。獨。笑。又。は。晒。周
と。云。下。と。ト。ト。

卯月

才時之危

流斜之舞



あし人の心の奥乃流流くとすこと
あふをいふあふんあはれり

才五 花江伽羅之助

即存老人来り。袋解一紙を完て一寸亀
殼出。這せく悠然として是を見て他事なく二指
を以擦りとれはいよく六を藏す。客云名誠實と
信して初る心れ敷る事の必有

四谷ハ
亀ノ美名

玄衣 督郵 時君 元緒

是よりして後程動破一子

花江伽羅之助 名附親談くと甲ふ事うり
る人より甲ふ金粉張るうりる爲信して。常ふ事
一其方も尾を引て出ちうと信し。かく信しうの

る世界のあふとも云。客又云。亀名名真云あつ。さ
ゆ。狂僧のこ。予云。古支物うりよ。ひこさう。新
一其事の事うりる新ふらうとの。信しらよ
ふとせぬ新に予花とちうん
と半新しうり。一我字活友傳鏡して
飛新子の甚法見新を攻うさひと
と連ふしと通うと信し。竊り笑せ給ひしを
誰とて信しとら我同と累た。大攻うめのと
もたうらうとら

龜一一名

玄介とも云

言ハ其こあう
馬きこよの哉
きやうとらめ

花江ゆめゆめあはれにきこえぬとてさす

才六 待夜の品 相伝文章ノ格

杜宇や一きうともおとひねるるに実そのうき
雅うらうらうとくへてもいりし似もはく屋まや

あはれをゆめとて思ふ人さきもあはれを流せ

あはれとてさきもあはれを流せ

あはれとてさきもあはれを流せ

あはれとてさきもあはれを流せ

あはれとてさきもあはれを流せ

あはれとてさきもあはれを流せ

いぬさ
あてき
小婢ノ名

あはれとてさきもあはれを流せ

あはれとてさきもあはれを流せ

あはれとてさきもあはれを流せ

あはれとてさきもあはれを流せ

あはれとてさきもあはれを流せ

あはれとてさきもあはれを流せ

あはれとてさきもあはれを流せ

あはれとてさきもあはれを流せ

あはれとてさきもあはれを流せ

あはれとてさきもあはれを流せ

編糲
今云ヨリ
の事也
はが細
りも知

我。亦。さ。唐。の。衣。り。て。も。此。静。は。針。と。紙。と。心。空。如
且。ハ。編。糲。の。ぬ。ま。し。ら。る。ま。と。さ。と。針。も。こ。ら。運。て。指。子。痛
く。ぬ。り。ぬ。ら。る。血。も。こ。あ。ま。あ。ふ。や。来。る。人。の。さ。あ
道。の。あ。と。あ。て。關。淨。形。ん。と。あ。る。か。を。と。め。る。編。糲。世
吾。能。淨。苦。有。た。ん。ん。と。也。叶。本。よ。ひ。と。一。死。魂。ど。り
も。さ。め。う。と。と。可。も。さ。く。雪。傳。く。我。を。さ。ら。う。れ
ハ。誰。ハ。ま。さ。こ。ま。り。ず。ぬ。ま。い。ひ。む。さ。と。さ。ら。く。我。と。あ。う
り。れ。誰。ハ。一。や。お。ま。ひ。は。る。さ。る。ハ。ぬ。を。さ。懸。し。て。悩。一
け。ぬ。り。一。ハ。我。為。斗。子。天。の。悟。と。か。う。ぬ。と。お。り。ぬ。ら。も
又。空。恐。し。き。也。美。樹。風。葉。ら。た。浪。の。音。れ。崖。と。あ。り。斗

平。吹。渡。り。て。隣。被。る。環。と。も。れ。あ。う。お。の。き。座。根。よ。不。え
さ。べ。竹。細。お。ま。さ。と。や。印。し。め。く。あ。を。あ。や。待。人。あ。り。と
あ。う。ん。ん。と。こ。こ。の。今。た。う。り。と。と。あ。り。さ。ら。紙。何
事。も。ぬ。ひ。し。り。よ。ま。め。て。心。せ。う。る。也。美。風。吹。葉。を。し
吹。き。ぬ。り。て。月。正。一。く。水。平。印。し。て。ま。ぬ。く。う。さ。世。を。渡。ふ
い。と。ん。よ。あ。み。わ。蟹。の。事。へ。き。さ。唐。の。事。隔。の。戸。と。也。と。也
より。加。高。れ。ぬ。り。あ。れ。と。お。ま。り。と。於。ん。ん。と。傳。子。押。的
ま。え。清。く。肉。は。ら。さ。る。あ。ま。と。の。お。と。一。ら。れ。付。や
世。を。不。ら。て。合。款。の。ぬ。れ。と。と。よ。ひ。と。み。て。き。と。原
さ。ま。お。え。あ。ひ。て。は。さ。君。の。道。教。の。掟。も。あ。て。く。あ。り。ら

ちくくひひくしてそくくハ厨の西の方子麻子形ん
 と。尻うぶくうー海き母とた帰し。まをを姓ハッを
 其持く。空然しく走り出た。れ本ウけに於て足
 曾ハ形たもせくしく志の先ありともまゆんや
 ハーうはう哉されハとてうがれもま形みと
 うむ方もあうさ被く。あやしくさ被く。ひて
 幸然くをさうて喚く力州ありと神ふはくん。様子
 可を押入てよんうー。ハ原交てハなあせとり形
 此もうかと信り

ヤハハ
 信り
 信り

こ夏の長乃殿をまやうと云くゆりたをハ外ふ

通ふ家のそく形うくぬあう成へー是より変
 長を信画んるの神あうんうと流く評

才七 貝之流

鴻朝ハ蛇の蓋子流を
 北むよアキス

世貝の名をハ離と呼へー

竹の子お
 鏡の
 隆季

竹の葉子ヲ離れ葉を折るく

花を物く能ん玉のさのは葉

とよみきり

実ハ始して高ハ子とを玉乃菊

才八 日ハ是好物

一 大工

二 若白麦

三 能

四 芝居

五 傾城

六 歎

七 歎

八九 歎

十 死十生く病老老子情銅臭人

花あさほやふすもやねくへ物

古き偈

之文四葉十月念二以二字換十則病魔降去

才九 雜話 比叡之菜食異波之茶

善の日空——うらさるに空於の人の心形くちり二人連て

叡山へまき老の蹴上の念書く者此方へまき老亦六大師へ詣

又阿りまき老へ——と云捨きりまき老と阿りまきのあへ一人

まき老一人に記しなくまき老り 拙とまき老の益もあはれ月よ山坂を

かきりし先ハ月とのまき老もい川——高銀音してまき老切あ

海の風をぬまらさく拙まき老く 叡山へ上りまき老と必といひ

物米のまき老て坊まき老あへ約まき老りまき老後淋しく何故とも

まき老らまき老といひまき老ハ茶米先——まき老うくまき老志行へまき老

回者米をあしひ一人の男ハまき老を厚くまき老く長く

西角小おり——た拙まき老りまき老くまき老て焼あぬも焼まき老も

山打はまき老入しまき老くあしりく——まき老の切ら先——まき老むく

津守形は舟に入てはささ出—生本の枝を打て笑みして
 いさしく心まうせふまゝまゝとて何やうなるも知らぬ草くを引て
 船中打り出—してきよらあま—ては打つ佛と打つやだ
 作りささく徴をて—叔山なるを流より連りさあさく
 さたへまゆり扱ををやくなををす—してむしてゆり
 とふ—とと云ち—まきりあつて一人の男まき
 りふ—このまの—みえさ—月あつ—八奇—まよ—
 まりする—をほ—なま—身をを—ま—
 常く大はへ掛を紐末の時いた石の山もんよ—とめは
 年も同ふ—とつた—と叔山ま—とあ—ま—出立

へり常ふむさくさく—とと—車牛の害きも昔
 めさ—器ま—新堀の—山は—伊勢り—の—
 耳や—す—像よを井のあ—み心—さ—
 して福打常言歌書—こ—出—湖の
 風雲—あ—つ—なる—吹—を—の—や—
 らく美人の心—なる—如—大師の御意—先—
 叔山よ上—物—は—へ—は—
 あ—は—あ—く—委—飯—不—加—城—の—て—
 かる—は—ひ—く—物—く—志—あ—も—
 おは傍ハ秀盤のき—つ—と御佛—は—
 文集三
 十五

世を離れしむるれをむきたるべおの不加城なる世も
ま集地をふいゆして群集さへんるに一藩王城
の守護山と取り侍るふをうひかへし有難き力又
いぬあつた遠くは山後くさくはくと云推出
ちると此二人の風雅れ有と如きとのをいひ先是
非と論あれたりあり何處よなりとも上子下子れん
的意前名くくはれと一平例の老ひくこの心出来
てあなまのむへんるも馬上下を坂を上
くしとおもひまらして六田よりいふも疲るるをく
て新製れりの引つけえおろしえとて世は意花王堂

より至り

と一結山世界のむき歌くくひ
や真実の風情世人を罵言して下りぬ
昔後老女の方より一歌吐し侍るおやんくくし下
の風色をうらりちて吾もよりの歌うぬれは流傳乃
河宗といふもの其序ありて其れうも初て去年の
春海よりあつたよりむはたりしちあまとも柔屋も如く
吟物も如くおく不自他ありとま息よくてしあま山人
叡山も料理茶屋あつたしとおもつるるく仍て名白ハ
中出されぬりふま

ふくやう多秋の草木のあらし

月のうけくれ中平志らるる

と長孝酒を好て秋をメ抱く。其時以時の以時を
らたかりて。和和秋を作らん。ふさふあらしと

且

柳森ノ二字
白氏文集

柳森観

と今日形小峰りてめて。一字秋暮光の臨風を草
色。故背て抱ひ故有て交信。清くまた雪の空を
く。嘆くむ静ふ。落る毛私んて。わづ。吹きて共ふ
耐地上多る。洋小豆能とく小松の安むいし

ハルカ
洋小豆のそよ
寸馬五人

と今も昔も行旅人の傍。反照してくと故陰寂あらし

光。岸がけの紅。火影池水亦映まハ。わづ波流

表のせえさや
くく
怪る不

をを刻愛てまき音を短く。表ひせんさいせ
んさのやよみ博のせんさいや

時のまき箱根のうみね嵐山

池塘生春州

塘のまきくおめりまて。夜まわく。平岡の松風顔

鳴禽裏り
雨んて

まふまきく。鳴禽裏り。雨んて。鐘をうり。今乃

園柳之愛鳴
會

漁虚亭中ねる床のうらち子ハ

さゆりある。琴うた。ん。静とりて。秘先をす

右各謝靈運
登池二樓

小を肩こくハ世トエグニ衣を着たりや如の
 志似をする者もあつやアん集ハ中ノ人
 とおアありやうハ和尚云こ如く極めを者小
 程言も佛好志こも由上よとありハた極
 ありハ都と云いふもや作ありやう極ハ
 程云く大乗ハ約極とありハ畜生と
 大切のやういつまや如くして法人感ハ
 今く暫く畜生の心アリあり正ハ極よあり
 道ハくや此貴人も暫く修道ノ中釈
 迦の教を熟得して佛の心裡小付ハと母

ふハ一極ハ淨極の魂を似まんやハ修道あり
 まさるハ一形ナリ先其法甚及ありやめを程を
 今く中と云われれと極ハ佛道を感ハ
 大と建立ありやうと云さうハ一極一禪サカシキ
 哉佛印極ハ東坡も

才十三 竹衣術

名井ハ天ノ字ト云

天乃字を々して地ハ極まはる井の程つ
 くらとをせらるも人乃世アリあり賢ぶおとむと
 ぞじ。家子ありはるふ所の意。法交ありむはじ
 まあり。是をふまはるたいと師ハく復子祿よけ

口ふつひん書よ感きしりるる。續きし
うけ東台人をちみしつまなく病の外ふ
ららふ。そゆや心をせしつらん。新書を讀て
初身を心取しは時をあらわし人。秋乃
夜は月の光も寂しうりたりとす^備たるも。
吾も同笑風身はうし次して。表れ書らひんさ
ふおねもあらくしとねと二士をゆさう。おぼ^いて
初老の心もさえぬさそのわら。遠きう海どわん
かりは枕やけりふさくまはあつくくおをいひ
せは。いそくもくありやとよみゆりしりう世は

不也己^モ老と云志^モの表ふをうりて。おとく
さこのたれ光を琢て時ゆくと日あらん珠を
んとの忠岑う心れろ。ひくわらね懐みし
ひ傳うも。矢を以射るうと一^サ屋形なり。
いうく^ハ禅師の指を伝んや。古人若^シ其^レ矢を取
つて^ハ投下^サん^ハ氣^ハ胸^上と^ハ中^ハ終^ハん。窮り^ハ平^ハ行^ハし
心抱んや海し。心乃過ち憚らるしてあらしむ
とも光り形をまれば。けきもあふ実とをせはるは
續き^ハ及^ハし^ハ也

我胸^上に^ハ多^ク
う^ハ氣^ハ胸^上
に^ハ心^ハ

第六 新波屋松

富士乃暖いよき哉臨一。麓のよき雪を
てしこの花の露も三保の夕暮。芳根れむ
あかくぬき
こま万のりたる子侍乃枝派。下田却く世家
のきぬふけよのくま子入ん

夜て渡幸出あをみよりの又月を

このそやめおるはせは止まてとみよ
侍

オモ 報信ぬとむ法を

森友ととい及る信布高者有それ以小燈。旅通
ふ法をへしちよといへるある。旅通とこのとき

夏濃子法かへ事集を束とると石とくさる
まやう新よ旅し。筆乃さぬ法とぬりし
お娘を孫ををとおひね。武門の露く目から
ぬるふはちや△りやあし人目ぬき登乃菴
なくもんのゆかむね方とと護るをすく
旅通便ぬくおとひ女合をまはるや長かすは
るこひ洛外おれりしを伝るる不章のねとこふ
て。とに法をぬくくか子走しうりなれ。各
り又婦の口きくかひ乃法のをそ歌別でんお
自らあつこのお通ひすへるまは。なれなき

楸の上又ツ
不又儀ツ思
浦のうま
とが格の上
あつの人
さういふ

初て便をして。楸乃う人五ツ永楽一費とる。源
ちよら方へ一章二飯なり。さういふ先なる奇
△
中とちさるなり。奇家よのきとけけより人の
そ後乃和しくなしくいふ。まきとく業
ふとく。はさ。後さ。一に。その秋をささる友を
ちよら。ゆ。さ。女。い。く。歌。さ。さ。一。て。その言
ひと。さ。格。て。五。源。の。楸。れ。さ。ふ。さ。飯。よ。ひ。月。の。あ
ふ。さ。あ。の。あ。さ。他。も。好。ま。さ。さ。ま。さ。お。る。後。一
け。さ。一。さ。さ。さ。さ。中。と。後。さ。あ。さ。さ。と。後。て

は入るを文ひゆけのちよやを呼わうりぬ。此
はしと終不稀く知人ぬ一

才十八 与列高月甚高は杖を握る

杖之給 蛟姫と号く

後教而と云 祇空杖之給 幼童丸と号く

弊老の持之杖 榎保前

桃竹杖引に
老杜カ以語
幸也

也 峻く字六杖劔或と蛟龍争重為告曰杖兮杖兮爾之生

甚正直 唯ハ其是唯の奇とらむまふ

甚正直は三字心アリ

世三字心者
杖主甚在
ト云

才十九 羈中愁夜

心かな敷夜を更なる我風雨浪を去て家も
くを心とよき海遠き枕をさしていねるく唐
の熟乃寢を積とらさるる人あさ様私の灯を
ゆね園下吹ちるされ思ふあさう岩も清ふも
かふ屋ささき使もあなひも志くぬ日乃本の
明る我情恨む人のう海乃りきも乞ふいと
かしく痛く思ふもつと腰を折して一奴を解
くもく自にけくも思ふも皆人も思ふてわたり乃言
新あやなき夜といひ新り一物も思ふも人ふ

盗人も思ふ
斗の言新
蒙求

途日ゆくも去り下細乃とまきちきもやるを

衣の衣
衣袖の衣
衣
況かうか
うなりて
衣程え文
曲たん

一き家ほつとく根もぬく憎られ鐘を十はの
かうと打せえく雨ふ嵐も朝をきき志さるをなく
形りく更りほしきもやより魅さ刃れきよりとて
もあうハ遠くあうもぬの貧しき足跡の跡方我
喜んたとわたり乃高来れくもそのまねわくもあや
冠社も今いへくもはかりふ端くあやしき事ども

酒池糟岡
紂本記

おの光之主月ひかりのりり母をれ鬼も多のさすもふの
照さるよりてう世は波酒池乃あ事不のあされ
ゆく息をぬくと次は所なくや却てきた
ぶくささくく久米乃さく山交り鬼なく美古
の愁を拂ぬ其まも光此貝ゆかす此銘玉測
と解る

才廿一 洪水

水成ゆき氷を捨答ウチたもくあま果を捨たさ
これの境を備一日紙包と月を偷み六月子
了神て孫るささう下倍十月を存て神母と月と

これハ
丈の櫻

一節子仲中川の
師と夕立を
師と夕立を
長孝

則神ある。水や月のみよりさ早月ふちうう。雨と
るる日も水と成あも皆人乃ささひはうと地
へ。楽しあさハくくむの掟たうく智者ハあめ
孫のくぬを塚う。清き流よん紙流ふん。鎌平
旅入まは九うくは象思よくさハ角あうと一
て。系は流ま。彼をさしてハ岩をいささ森を孫ひ
林を穢て出良。それ。幸徳の鏡となしてハ漢史を
洒き釣糸をさくさあ紫糸を飛た。風の怒りて
るを歴せと對てく骨ひうり。なま嘆た。みつあ
らるうくひあまを打。音成踏ひく仲中川の屋

今夕何夕ハ
老杜カ行ノ
詩

とてもやれどもさうや。川あやも堤為て棟を
敷き。今夕へこそ是れ夕へそあなや。舟中
蛟を討るのめあや。此茅屋棟。船あや。早苗え
きその原より埋あな。乃里く。里のあや
くし。里茂失ひ証叫ひ。古鼓。呪さう。岡こく。船を
以のちを換んて。真をえ。梅。整く。松下に倚て。笑
て。一句あり

譬よぬかれ。鷗を遊ふや。蔓ま葉

一白之意
富天云。呼子
数人
雪川云。故

あなさ。垣も世。此彼の立。折ら。斗。求。て。も。や
め。う。さ。た。や。有。て。き。の。ま。ま。は。ま。て。空。一。か。く。は。い。ふ。ふ

とん一入。障あさう。い。う。見。晴。る。新。祝。一。重。ハ。水。窓。の。灯。子
そ。う。う。

元文三。一。先。結。と。一。六。月。上。院

才。七。二。か。く。讀。と。一。不。抽。紙

婦。り。も。人。乃。も。と。く

か。う。結。と。の。と。ら。ふ。事。い。の。な。海。名。ろ。と。世。に。禱。く
論。ら。る。事。あ。る。あ。く。く。好。く。は。或。ハ。糠。子。讀。る。抽。中
へ。糠。乃。抽。と。云。又。ハ。大。根。を。以。テ。神。子。供。よ。よ。り。く
神。の。地。と。う。う。神。く。や。云。訓。を。か。く。と。う。あ。へ。一。
皆。と。う。う。う。禁。中。其。を。整。而。へ。女。房。の。扇。と。り

おかし哉まじくせよと呼時味暗をさす一物
半上右今交也。みそは漬くるをわくのこれ
とこそ。昔の字哉下は半文字哉用るれ余情
もよハと居る後津のんなる居る。善比あかち
南より白ひ来るるすちを寄まとも。此れ皆以雅
の要とて取取あらん。さかす漬をるふあつて
糠は塩加へて大根を漬て。家く民くさの細
文れ事とちあつね。さ中ふ難を出さるもの
を。稱一さかす漬と云。西域よあつ漬をるこ一
あつた。いこのちあかす我。世のさるかやさるあつ。

筑紫
押使
洗使

細度の候雲葉形葉と到ては情のこゆや
ちりり。秋の日報月と云人よりかこれ物
は。さ味いひか。さ若け蘿蔔ハ筑紫海菜
押使。却く好。さおあひのやあらん。さ
あハ板登の来りらると母おぢたのる事も何
ら。や日登るる。純々。さ此之乃歌さ成匠

三月廿三 我士行

竭^レ暇^レ眩^レ之^レカ^レ効^レ忠^レ貞^レ之^レ節^一 繼^レ之
以^レ死^レ真^レ老^レ臣^レ心
人の體をさの、ぬの姿見。大より法一とて

蜀相ハ孔明ナリ

かこもろはねんし。そりかゝるハ群士の忠
 信。嗟蜀相を主歌くへー。噫音かろくとそあり
 ぬ。天則賢ふあゝふは賢ふあゝふ。子も又名禪サカカ
 里そく。皆是平生憤乃みちとるおやそ
 白いと昔一たをねひく。誓とけり。みよー時
 あつこれ川の川流。感とみーの義務乃是たさ
 かよせもあろあ結との月影。其光の深き哉
 をもろとく。貴族の心ふ其光とく。其哉
 其過もあろく長く光のとく。悔る哉

其後一 孟子萬章

其義一や〜〜〜の山さ〜

蜀士の忠を不二の極を

元文五年

よみ〜〜の奇先耳遠〜先ハ不才と云人あり
 鳥丸光度ハ
 さおほふ〜〜のね〜〜の山さ〜
 か〜〜の山さ〜

淡々文集卷之二終

